

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

The Epitome of James Joyce' s Finnegans Wake
I, 4 (75.1~103.11)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2290

[資料]

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』

第1部第4章の概要

(75.1~103.11)

大島由紀夫*

(Accepted November 30, 2021)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 4 (75.1~103.11)

Yukio Oshima

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* I.4 (75.1~103.11). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' The part I translated in this journal treats HCE's death, grave and resurrection, a quarrel and reconciliation between two male characters (perhaps HCE and Cad), King Festy's (HCE's) trial and acquittal, a variety of rumors about Festy after his acquittal, four masters' argument and ALP's affection toward HCE and so on.

Key words: *Finnegans Wake*, Part I.4, epitome

動物園の中のライオンが涙を流しながらナイル川の睡蓮を思い出すように（肉に対する欲望が肉から受け取るあの友人バッカスたる血のことを、ライオンは忘れるだろうか）、あの29名の着こなしの術には長けているものの、非常に厄介な娘たちが封をして郵便ポストに投函した手紙で触れていたことらしいが、就寝中の追い詰められた彼は、もっぱら彼を破滅に追い込んだ、あの汚れなきゆゆ百合たちのことを、黙したまま夢に見ていたのかもしれない。そして彼は長い間姿を消していたので、彼の後をつけていた、あの用心深い彼ら裏切り者たちのことや、彼らがその場にずっといたことを知らなかったのだ。けしからん、恥を知れ、小間使いの娘どもめ！ 手癖の悪いチンピラどもめ！

【こうした輩は】存在すべきなのか、本当に存在すべきなのか！ 我々は急いでこう問わなければならなかったのだが、彼は後ろを振り返って見たのだろうか。前方にあるのを見たのだろうか。恥入りながらも輝くトウモロコシの毛のような金髪がしゃがんでいる【排尿】小麦の野を、小麦の収穫物を。我々は知らなかったが故に、幾分かでも信頼できる町の新聞を通して調べてみなければならぬのだろうが、彼は深い洞察力（願望が単なる暇つぶしに過ぎなかったことはなかった）を働かせて、町の北部にバイキングが建てた柱石のようになり（実際に彼は柱石になるであろう！ きっと！）、家長に相応しい幅の広い天蓋の中で、3時間半苦痛のうちに沈黙しながら、不安げに椅子に

座って（1対のゆで卵大の観察眼をどうか私に頂けないだろうか！）、フィンガルの水車場で白馬に乗っていたキング・ピリーのような彼の敵のことを、自分の受ける害悪の深みを元に考えていた。そしてそうしながら、偽らざる慈しみの心を持ちつつ、彼を中傷する者たちが（彼らはごた混ぜの色合いを持った蛇という名の完璧な天使だ。ミルク、音楽、既婚の女が手に入るところならどこであれ、まだらの腹をくねらせ（跪きつつ這っていく奴隷だ！）、これらを求めて嘆きの世界の中を進んでいくであろう）、彼にとって悩ましい、まとまった形になりつつある想念（狼がもつような彼の激烈な情熱の許しを得て存在している）を、隆盛を極める彼の子孫の王朝の最初の代に、(76)一団の教徒たちではなく彼の家系の成長した子供たちに、神の慈悲が必要な、慎重さや鋭敏さを厭う者たちへの慈悲心を抱きながら、打ち明けることを願っていたのかもしれない。真の犯罪者層の中でも、ハム【フランスにある監獄】にいる住居侵入や強盗のような犯罪を犯した者たちを、「蜜の草原」【監獄が置かれた町クロンメルがある州ティバラリーの文字上の意味】が歓待し、「マウントジョイの山」【マウントジョイ・プリズンはダブリンにある監獄】が受け入れ、ついにはそうすることで雇用の常態化を直接的に生み出し、あらゆる階級、あらゆる大衆から犯罪者たちをなくしてしまうような、すなわち、恐怖に包まれた都市（守れ！）を暗殺者（やっちまえ！）が解放するような、要するに市

* Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学名誉教授)

民の従順さが社会全体の健康状態の一助となっているような、そうした今彼がいるところよりもっと好ましい場所で彼らが打ち明けることを。

さて、これでよい。かの世界についての憶測はやめて、この世界の現状に戻ることにしよう。さあ、聞いてくれ。再度言うが、これでよい。東に足を向けた、ピュー社製のガラス板がはめ込まれた、死という原因に対する物質的な結果としてのチーク材でできた棺が、適切に穴に入れられるように、その後遺体の近くに持ち込まれるようになった。親愛なる諸君、事情は次のようなものだ。かなり多くの保守的な自治体の議員たちが、町や港や要塞で自分たちへのあるいは自分への人々の投票がなされないうちに、今度ばかりは、諸君の仲間が一張羅の服を着て諸君のところを駆け込むような借金の如き複雑な事情から、自分たちの仲間の数を増加させる力をもった数々の主要な委員会あるいは他の委員会を通して、法律に基づく裁判所命令に従い、適正妥当な決議により、彼のために、彼の遺体がまだそのままになっている間に、湖愛好家の間でマン島【マン島には湖がない】が住みたいと思われていないのと同じ程度に島嫌いの人たちが住みたいと思っている最高の土地ネイ湖【この湖には島がない】のモイ・エルタに、一時的な墓を建てるというプレゼントを彼に与えたのであった。ちょっと待ってくれ！ フィアナ騎士団の団長が手一杯の泥炭を受け取ったあと、彼の遺体はかなりいかがわしい釜【墓】の中にあっただのだ。そこには古代の森が生い茂り、見事なくらいにどぶに似ている滝壺があった。そこには昔からの塚があり、マスの泳ぐ水流もあった。その水流は周りにカワヤナギが生えていることと、ウィルトやウォルトにおしゃべりの攻撃を仕掛けたことを鼻にかけていた。この男たちは、アイザックがその釣り竿の滴りに対してしたように彼女に色目を使い、そしてまた、茶色い泥炭を含んだ、彼女の愚かしい水の流れが、まさに青きドナウ川の川底に横たわっている初代の呪われたフィン人のように、神の怒りで死んで横たわっている人物に対して、さざ波を立てて押し寄せているのを度々見つめていた（彼らの金メッキのキルトが、彼の眠れる体軀に軽くかかりますように！）。

最高の出来映えだ。この地下の極楽、あるいはモグラの楽園になるはずであった墓はまた、おそらく灯台を逆さまにしたような形で、小麦の収穫を高めるように、あるいは旅行業を促進するように意図され(77)（建設請負人であるF. A. バーケッコ氏とL. O. トゥオホール氏は間違いなく尊敬すべき人たちとされているが、設計者であり管理責任者であるパーラシヤス氏の方は、これまでにないことをしないように強く求められた）、西洋においては第1級のものであったのだが、この我らの棟梁「城中の悪漢」は、あからさまにそれを蔑み、「帯状散布方式」の地雷の使用により爆破し、また、航空魚雷「オートン・ダイナモン」のうち片側右舷に残っている1130個（約）の魚雷が声をかける

中、爆破司令所から指令して、作り直したTNT火薬で破壊した。また、数トンもの改良アンモニアを使った地雷を配備して吹き飛ばし、そして【その破片は】爆風よけがつけられた舷縁に打ち付けられ、溶けて人をつまづかせるためのケーブルとなり、いくつかの穴をすべるように通り、司令塔から地上の電池のヒューズ箱にユルユルと入っていた。この破片が入った時間について言えば、誰でも同じ形のあごひげをもっているようには見えないが故に、置き時計と鍵とが異なるように、皆それぞれ異なった答えであり、置き時計を見て9時6分前だったと言う者もいれば、さらに多くの者は、ライン地方で製造された腕時計を見て、5時10分前だったと言っていた。彼はこの後、戯言が彼の口を飛び出し始めた時でも、また彼の粗雑な咆哮が完全にしゃがれ声になった時でも、また1歩ずつこうした状態に近づいた時でも（大目に見てくれたまえ！）、注意深く鉄の如き確固たる結果を、いつでも腐食防止を施したレンガとモルタルの証拠で裏打ちした。そしてボシヤンタワー、パイウォードタワー、バルタワー、ライオンタワー、ザ・ホワイトタワー、ウォードローブタワー、ブラディータワーという7王国の連合体である彼のロンドン塔に引っ込んだ。このことに刺激を受けて（もしよかったら、どうぞ参加したまえ！）、畜産農家の組合や特定市場【中世にイギリスの主要産物の輸出促進のために、海外に置かれた指定取引所】の商人のギルドなどのメンバーのような、都市建設の時に貸しベッドを営む、商売に長けた者のいる、実利を重んじる、公共のための特別審議会の連中は、プレゼントとして彼のために壮麗なる葬式の手はずを整えてやり、それに加えて石碑を築いてやった。そこにはマクベラの洞窟【旧約聖書中の、サラ、アブラハム、ヤコブ等が葬られた墓】で見られるような通常の告別の辞が添えられていた。語源的に間違った意味で使われている非常に美しい言葉で次のように書かれていた。我々のあなたとの関係は終わった。あなたがどうなろうと我々の知ったことではない。酔っ払いのエアウィッカー氏よ、諦念を知り去りたまえ！

しかしその家にいる者たちよ、そこに乗船しているすべての者たちよ！ 健康食品としてのスモークソーセージ、および屠殺人が柔らかくしてくれた豚足を含め、次のものを見せよ。棺、経帷子、安価なビール、骨壺、派手な真鍮製記念牌、カギ煙草収納箱、密造ウイスキーの樽、涙壺、帽子入れ、香水入れ、吐剤、食欲増進用の塩の袋を。そしてまたこの件に関しては、実際いかなる種類のものであれ、彼の名誉ある墓における、ガラスのような石でできた埋葬時の装飾用骨董品は、アア、当然のことながら、通常であれば、上記のような一連の状況とともに、これからも出てくるであろう。そして自然の成り行きで、アア、この骨董品により、もし靴が合うならば世界のあちこちを放浪するであろうこの者は、(78)豊穰な彼の人生における、毫碌する前の、老衰の前の老齢の、晩春の最後の寛容さを持った

日々を、ずっとつつがなく家で過ごすことが出来たであろう。そしてついには、ずっと泣いて過ごした苦難の時期は、発展性のない、老年の、死が予期される中で盛んになる【感情の】爆発と再爆発（雷だ！ 100個の雷だ！）との間で、大きな頭から巨大な足まで忘却のうちに和らいだであろう。

しかし時の勧告が待ち受けている。落下のあと上昇せよ、と。そこから生まれる雷の青い光は、地下世界に穴を掘って埋まっていた、住居不定の刻印が押された巨大な【はさみ】虫が、地層から地層へと、地下世界から地下世界へと、その地下世界の至るところで増殖し、有用なる我らの星、この神々しい星の上層部を再び訪れるのを知っていた。隠れた地から外の地へと、ポットと平鍋と火掻き棒と駄洒落の世界に属する、富を持った大衆の1人である、富を持った子孫を生み出す、人前に姿を現さない、金の貯蔵者がそうするのを。鉄道より前の光の道を通して。

アブラハムの台地【7年戦争において、フランスとイギリスが戦った場所】では、もう1つ別の忌まわしい戦いが全くの偶然で勃発していたのかもしれない。我々の父が（というのも、率直な子供たちが、フィントウンの殺されたキアン【アイルランド神話中の人物】のように、7カ所に埋められているよう、彼をやつとのことで説き伏せたからであった）、水の墓（何とそこには車もあるし、乗馬もあるし、リンゴのフリッターが添えられたスパークリングワインもある！）に3ヶ月も入っていないうちに、腐敗が相変わらず広がりながら、その脅威をどんどん増し始めた。彼らの間が焦げ付いているのだ。【真実を見ようとしない】目を覆った者が合図を送ると、それを祝福する新聞は洪水を起こした。何故この高貴なる者はその唸り声で彼を恐れさせたのか。なぜならこの思い詰めた者は、戸口めがけてマスカット銃をぶっ放していたからだ。【戦いは】双方のケルトイベリア人の陣営が元となっていた（議論を進めるために、新南アイルランドと旧アルスター、この双方の側の男たちが、ムーア人であれ白人であれ、ポーブ【ジョン・ポーブはアメリカ南北戦争の北軍の将軍】との諍いの間、あるいはポーブをめぐる諍いの間、文句を言われながらも、多少なりとも、高邁な考え方を持っていたことを初めに認めるとしても）。彼らが哀れな罪人であれ大富豪であれ、永遠なる存在者が常にいかなる時にも彼らのそばに存在して以来、それぞれが言うまでもなく完璧な攻撃と防衛を行おうとしている中、かつては純白のウールの衣装を着た人々がワルツを踊っていたのに（フン、何と犯罪的で、何と骸じみた、何と忌まわしいことか）、今はペローナ【古代ローマの戦の女神】がブラックボトム【1920年代のアメリカで流行った尻振りダンス】を踊っている世界へと、すべての状況は導かれていった。一方が若い頃に適切な食べ物が不足していたが故に、他方が自分の生涯を細切れにして、家族と肉切り包丁の両方に捧げるという名誉ある行為に既にとらわれていたが故に、そうなったのだ。そして

しこの絞殺された人物が【墓から】解放されたならば、(79)彼は誰であれ自分がハムをかすめ取ったその相手に対して、次のように仄めかしたかもしれない。平原は暗闇に覆われていたし、イヤ、まさにこの俺という、すっかりホイッグ党の権化になっている第1級の色黒の老人をさえ、丘の上で、奴のことをこう呼べるのならば呼ぶが、あのごろつきが見間違えた時には、サーカスでやるような程度の低い道化芝居だったよ、と。というのも、彼の敵対勢力の間に、あの感情がかなり広まったからだ。つまり料理人が言っていたことだが、巨匠エアウィッカーは、この世の中から半ば離れた人生を送る前は、バルマク家【8世紀頃のバクダッドの貴族】のように、スープと美食の間で暮らしていたことで有名だったのであり、こうした不活発な生活を送っている彼の場合、彼自身の長いニジマスとしての状態から飛び出て、完全に若いサケになることは、ずっと絶えず鮭梯を登り続けているサケが、密かに吸盤を使って自分自身の場違いなところにある脂肪を食うのと同じように不可能なことだ、というのも、女から生まれた者は、大きな鶏冠のある淡水魚のように、70匹ものローチを1日で食ひ食ったり、同じ数のヒメハヤを1分で食べてしまうことなど出来ないからだ（あの異種交配物め、晒し絞首台が奴を窒息死させればいいのに！）、こうした感情である。

婦人たちはこの最も早くからある都市（ドナドゥン

【Dana-dunは、アイルランドの神々の母である死の女神ドナの要塞の意味】に因んだ呼称をもっている）の邪教的な装甲の時代を蔑みはしなかった。この時代には、彼女たちの死者にとってハサミムシがそうであるように、また自分たちの遺産のことなど分からぬまま、実際我々が静かに横たわらざらう大地にとって土壌がそうであるように、我々にとって【尻を拭くための】大型の葉が、持ち運ぶのに必要な友人となっていた時代であった。ヴィーナスたちは忍び笑いをしながら誘惑者となっていたし、ヴァルカン半島では馬鹿笑いが起こるほどに無意味な戦争が勃発していたし、広大な全世界は変事が相次ぎ窒息状態にあった。実際、諸君が好きな女たちは誰であれ、2人1組になってさえ（その有り様を見よ！ もう1度見よ！）、午前でも午後でもむき出しになった長いヘアピンを取って、男と、気に入った男と（あるいは他の男たちも交えてさえ）可愛く遊び、幸運を願い、男色の男も相手にし、すべての男のうち比較的気に入った者をつなぎ止め、最も気に入った者を自分のものとした。（チップを！）そう、彼女は求婚し、勝ちをおさめるであろう。しかしどこで結婚するのかは神のみぞ知る！ それは東屋だろうか、バケツ置き場だろうか、幌馬車だろうか、排水溝だろうか。4輪馬車だろうか、客車だろうか、手押し車だろうか、肥料運搬車だろうか。

未亡人のケイト・ストロングは（チップチップを！）—彼女は彼女が知っている昔のダブリンの、手刷りの路地の地図絵を我々のために刷っている。陰鬱な夢のようなドラマ仕立てのセッティングで、強烈な色彩の、非常に視覚に

訴える地図絵である。そこにはひよこの糞のついた脈斑岩でできた心休まるコテージ、人目を引く猫、だらしのない女が飼っている小犬、腐った野菜、腐敗したゴミ、石ころが描かれている。最悪でないにしろ、こうしたものを介し、各家の粉々に割られた窓を通して、食中毒の細菌が楽しげに飛び散っているのだ — 未亡人ストロングは当時、夫が死んでしまったので（チップチップチップ！）、よき王ハムレット治世の黄金時代から、たいていゴミあさりを行っていた。とは言っても、彼女のやせた胸は、ほんのわずかな自制心を持ちながらも、その溜まっていたものを吐き出していた。そして彼女の腹蔵のない言葉は次のようなものであった。(80)この古い都市の夜には、「ブライアント街道」以外舗装されたまともな横道などない。そこには、縁にクワガタ草や白いクローパーや森にとってはおなじみのカタバミなどが生えているが、それらは蔑ろにされ、踏みつけられている。またそこはあの提訴者が襲われたところであり、自分は、清掃人の習性をもつ清掃人ならそうするに違いないことだが、持っていた汚いゴミの山を、フェニックス公園のサーペンタイン（自分の若い頃、ここは「善良なるフィンの聖なる形見」と呼ばれていたが、後にせせせ洗礼名をつけられ「パトリックの浄化場」と呼ばれるようになった）近くに捨ててしまった。ここでは

デインジャー・フィールド

危険な野原がブッチャーズ【フェニックス公園の一部。デインジャーフィールド氏という人物がここでスタークス博士を殴打する事件があった】の周りを囲み、ファイアーワーカー・0・フラハティー氏がキャッスルマラード卿に仕えるナッター氏という人物と戦い、またアーチャー氏【前出のデインジャーフィールド氏のこと】がスタークス氏を打ちのめしたところだ。その一帯に化石となった足跡、ブーツの跡、指の跡、肘のくぼみ、尻餅等の跡が連続的に、非常に含みのある意味合いを持ちながら残されていた。書き物、即ち恋文、欲望に満ちた彼女の恋文、男に対する欲望であろう彼女の恋文【ALPのHCE宛ての手紙】を、手に松明を掲げた、トールを崇める者たち【ヴァイキング】から隠すのに、スズカズラが生えているこの軍の野営地以上に、騒動が終わったあの時以上に、人種が分けられ始めたこの場所以上に、繊細な時間と場所をもったいかなる世界があるというのか。まさにここで、未来のことを思う4本の手によって、和解の最初の子【手紙】は、懐かしの我が家の最後のゆりかご【大地】の中に横たえられている。それを渡しなさい！ それ以上はいらない！ だから子供のためにつるはしを渡しなさい！ アア、男たちよ！

というのも、まさにここで最高位者が、異教者に対する布教活動のように、キリスト教徒に対して語ったからだ。そして結婚に関して述べる時の彼の猛禽ぶりは、その獲物に対するくちばしを鋭利なものにしていた。死ぬべき私たちは皆少しづつこの大地へと戻っていく、過去の状態はそのままに放っておけ、と彼は言う！ 松明を持つ司祭であ

り、火を煽る祭司であり、ジュピターが置いた森で燃えている火を興した風の管理者である、性急で浪費家の大工にとっては、それはあたかも、私たちの太古からの記憶の洪水が、曲がりくねりながら従順に、アグニ【火の神】が赤く燃えたところに、ミトラ【光の神】が教え諭したところに、【スペイン人が】マヤ族を滅ぼしたようにシヴァ【破壊の神】が殺戮を犯すところに、彼の粗野な言葉によって引き戻すようなものだ。変節するポセイドニアス【紀元前135年から51年まで生存したギリシャのストア派の哲学者】よ！ その忌まわしい石ころはそのままにしておけ。お前は前前の汚らしい淫らな女と、前前の行く手を阻む大木をどうするつもりなのか。大聖堂の裏側をこっそり回れ！ 恥さらしのマック・シェーン氏よ、その樽を、手に入れたところに返しておけ。そして前前の祖先が通った道を進んで行け、「和睦通り」を！ そして、何ということだろう！ 飾り帯を後ろにたなびかせて、あのお行儀のよい女の子たちが、エブロンドレスたちが、学校全体がはしゃぎ回るかのように流れ出た。礼拝堂にいるイシーよ！ どんな人物であれ、ルカのような人物になれるか。

(81)そう、たとえ目に見えなくとも、近くにいる者の生存能力は不滅である。そして私たちは彼の感情を害することもしない。ずっと波が跳ねるのを見ておけ！ 川【ALP】の波が跳ねるのを！ もしこれがハンニバルの歩んだ道なら、これはヘラクレスの大力を要するような、困難な作業によるものだったのだ。10万人もの奴隷が道を舗装した。霊廟が私たちの背後にあり（アア、多くの者の父である巨人よ！）、そしてトラムの軌道沿いには、10万人もの人々がよるめく中、ブラフマン【インド神話における創造の神】、アントニー、ヘルメスが作った一里塚がある！ 未来永劫常に存在する。アーメン。しかし過去は私たちに、今日の走り行く乗り物のための道を贈ってくれた。偉大なるオコンネル通りを！ あなたは【ALP?】雨に煙ってはいるが、分厚い皮膚を持ったサイのように太い神経をもっている。でももし彼【HCE】が恋に悩む男でないとしたら、あなたは帽子を帆立貝の形にするであろう【帆立貝貝殻章は聖地巡礼の記念章】。そして聖なる4輪辻馬車という名の聖堂に乗って、少し離れたところに向かうだろう！ 止まれ！

それは明らかに荒れ果てた極寒の、当時は岩だらけで今は再舗装されている、この地にあった塚のごく近くで起った。その塚はラトレル【ヘンリー・ラトレルは、17世紀末の祖国を裏切ったアイルランド兵士】が買ったとしても売ってしまうようなところで、ブレンナ峠（今はマルパス地区【ダブリンの1地区】だろうか）の鞍部にある、真の文明から3分の2マイルプラス3分の2マイル離れた、彼の夢がそこで止まったところ（ホースだ！ ホースだ！）ではなく、川の流れの向こうのリーフランド【リヴォニアとも言い、現在のラトヴィアからエストニアの地域】と、洪水により塩気を帯びた荒れ地とが一体化している場所であった。ここで、身長が中背以下で、実際生まれつき胆力

は持っているものの冴えない顔色の、クロボトキンのようなあの攻撃者は、あの敵と渡り合ったのであった。この敵は脚力という点では彼以下であったが、その差以上に多くのものをその目に持っていた。そしてこの敵を彼は、激しい雨の中、オーグルソープ【ジェイムズ・オーグルソープは18世紀の慈善家】か他の誰かと見誤って — この敵はいい一見、頭も足もないひよこの前の卵に、ミケランジェロが描いたかのように酷似していた —、略奪されるのではないかと思ひ、神をも冒瀆するような言葉を用いて彼に対し次のような旨のことを言ったのだ。すなわち、あいつらの半球体【頭】は飛びかかって消滅させてやる。しかしお前には砲弾を食らわせ、その汚らわしい人間のクズとしての命を奪い取ってやる。そして完璧にお前を横たわらせてやる。汚らわしい悪夢を見させる奴らを、つまりあの3人の呪文士たちと2人の娼婦たちを（すべての人は神聖である者にとっては神聖なのだ。髭を生やした女であれ、乳母である男であれ）同時に横たわらせてたらずぐにだ。一発パンチをまともに食わせて薄汚い魂をお前から抜き取ってやるためにだ。そして彼は持っていた、いつも家具を壊すために使っている長い棒をつかみ、彼めがけて振り上げた。こうした特に粗野な出来事は昔から繰り返り起こっていた。この2人は（彼らが互いに渡り合うウエ・リン・タウとニッポレオンなのか、あるいはラズキアス【razziaは「侵略」の意味】と、彼を偵察しようとしているボブニコフ将軍【1904年に暗殺されたロシアのフィンランド総督】なのかは分からない）、明らかにかなりの時間もみ合っていた(82)（一方の側に揺れるゆりかごは、握反握の法則【作用反作用の法則のこと】に基づき、反対側からも等しい揺れ幅で揺れるものだ）。彼らは安全面の規定では無制限1本勝負のルールの下、高貴で高位のティペレアリー州のスウェーデン人【purple top swedeは、「上部が紫のカブ（植物）」の意味もある】（神に対する熱意を持った神聖なる救世主たち!）のように戦っていた。この戦いの中、物乞い用の最高級の器を開いていた背の高い方の人物は、らせん管【蒸留器内で蒸気を凝縮させるパイプ】（持ち運び用蒸留器を表す便利な言葉である。これは3つのタンクと、2つの壺と、いくつかの瓶から成っている。とはいえ、双方がアルコール飲料に興味を持っていたが故に、金額については意図的に言及しない）を持っていたチビの方の人物に、オイ、あんた、どいてくれ、あんただとは分からなかったんだ、と言ったのだ。その後、夏至の暑さで休むために間を置いた後、この同じ男（同じ彼だが、前とは異なる、もっと若々しい彼）は、非常に醜悪な薄笑いを浮かべながら、母国語で、あんた、聞いた話だが、4ヶ月から10ヶ月前、6ポンド12ペンス、スリにとられただろう、と、訊いたのだ。大部分の時間、更なる衝突と冷やかし、そしてまた事態を変えようとする試みもあった。そしてこの時ウェブリーのピストル（私たちはすぐさま、非常に多くの不穏当な文書を送りつけた、昔からの友人ネッドのことを思い

出す）の形をした木でできたものが、この侵入者の体から落ちた。この侵入者はそれを見て、あのクライスト・チャーチのオルガンのあの胴の中にあるネズミを見た猫のように心を奪われたものの（リボンをつけ、お下げにした物憂げな少女の姿の雲の像は、淡く若い魅力を放ちながら、彼らの上に浮かんでいたのだろうか）、馴れ馴れしくなり、小型の金庫の考案に相変わらずこだわっている、偶然出会った彼の仲間に対し、冗談や棍棒を脇に置き、偶然的要素を加えつつ、彼らの互いの所有権を執拗に確かめながら、自分のシャツを引き裂いてでも、とは言わないまでも、吹けば飛ぶような10ポンドという小銭を、今持ち合わせているかどうか知りたいのだ、と言ひ、つけ加えて、いやね、6週間ほど経ったら、あんたのような模範的人物がこの前の6月か7月にとられた金額分だけ、そこから返すつもりだよ、どうだね、大将、と言ったのだ。これに対して、もう1人の、碗を持ったビリー【アイルランドの殺人者である乞食】は、それまで口をつぐみ考え込んでいたのだが（というのも極端な行動をとることをためらっていたからだ）、かなり愉快気にこう答えた。君、次のことを知ったら君はひどくおお驚くのではないかね。つまり、あいにく、僕は正直なところ、今僕の身の回りのどこを探しても、少なくとも吹けば飛ぶような10ポンドというものをもっている状況にないのだよ。しかし、思うに、君の言うように、クリスマスの子供、つまりユダヤ人の祭日なのだから、僕は僕の取るべき道を知っている。(83)ネエ、君、「ジョン・ジェームソン・アンド・サン」の製品【ウィスキー】を買うには持っていた方がいいかもしれない4ポンドと17ペンスの金を、あちこち飛び回ったり、人を畏にかけたりして工面して君に前貸することは、いいかね、僕にとって奇人変人が犯す馬鹿げたことだし、君にとっても間違いじみたくだらないことだ、と。記憶の火が再びともるまで暫しの沈黙があった。そして次に。心が躍ったのだ！ ジョン・ジェームソン、耳が生き生きと捉えたこのウィスキーへの言及は、最初の語が発せられただけで、のどの乾いたこのガンマンの心をひどく打ち、彼の心は躍ったのだった。しかしその心は奇妙にも穏やかなものとなり、率直に次のように、彼個人が崇めるあらゆる主にかけて誓って言った。定められた法の下、定められた照度で、地獄の茨の木(炎)

フロントが天にまで広がるかもしれないが、自分は石頭の火打ち石の子（後天的言語に対する先天的語源を全般的に記している虚無的な用語辞典においては、この言葉はいかなる意味においても言語ではない。前出のいくつかの箇所而言及されたこうした戦いの記念品が、ジャグのようなもの、すなわち消化できるものと請け合うことが出来ないのは、自分の使っている言語にキスをすることが出来ないのと同じようなことだ）として、いつかはあんたのお役に立てるだろうし、自分が今言ったこのことは覚えておいて欲しい、と。そして次のように、物憂い調子で、人生の最初に舌が

話せるようになった時よりも、ダン・バンク【レストラン名】の真珠の母【牡蠣のこと】を前もって味わう時よりも、またシャンペン — それを彼はタラの「レッド・カウ」亭、それからリングゼンドの「グッド・ウマン」亭で胃の中に入れ、そのあとブラックロックの「コンウェイズ・イン」亭で、そして何よりも、全く忌々しいことに、宗教法の下、不屈の女王タイテ【アイルランド神話中の女王】の恩寵と彼女の遺言により、葬式の時に食欲が最も高まる場所の、クウォリティー通りの「アダム・アンド・イブ」亭で、口にすることであろうが — を流し込む時よりも、一見はるかに楽しそうに言ったのだ。ご立派な田舎者のあんた！ ディラニーさんよ【フェニックスパーク暗殺事件の犯人】、どこにいてもあんただと分かるだろう。あんたが生きていようが、死んでいようが、ともかく心からあんたにこう言いたい。たとえ白い斑点！が骨質部分にあろうとも【ハゲ】、一体全体あんた以外の誰が他にいようか！ 自分はこの金の玉であり、夜の夜でも日の光が当たるこの惚れ惚れする人物を、何と殴ってしまったのだ。いいかね、ルンペン君、見上げたことに、第1級のドイツ人的根性をあんたは持っている！と。彼は拳につばを吐き【手のひらにつばを吐くのは、取引成立の握手をする前のアイルランド人の習慣的仕草】（求め）、出来るだけうまく傷を覆い（許し）、最上のもの【握手の手？】を突き出し（チップは軽打）、友に別れを告げたのであった。そしてこっそりと、フランスの雌鳥【クリスマスキャロル「クリスマスの12日」中の歌詞。恋人からの贈り物となっており、原詞では「3羽のフランスの雌鳥」となっている】を口ずさみ、急ぎとゆりの入った鞆をもって、1つとなった敵同士は、同じ腹から生まれた兄弟のように、和解の抱擁を交わし、【ボクシングのクリンチみたいに】拳を握り接吻し続けようとした。丘の上で主を褒め称えよ。人を殺しながらも主を褒め称えよ。すべての人が法の下に主を褒め称えよ。そして彼は日の神【太陽】の前で、戦士たちがコニャックで取り交わした和平協定に基づく停戦を承認すると、モスクの方角にへりくだってまっすぐトルコ帽を向け、(84) まず数回にわたって、アラーの力によって万事良好、という言葉をつき、呼吸を乱しながら、雄牛のように駆けて、ロバの背のような橋を渡り、折れた歯を根ごと吐き出し、デー人（デー人）の金貨で7シリングと4ペンスの金を持ち、彼らの血のついた棍棒や他のユソウボク（ユソウボク）でできた正体不明の武器 — しかしながらそれはピーリッジ【アメリカ南北戦争の戦場】からリトルホーン【リトルビッグホーンはカスター將軍の部隊がインディアンに全滅させられた場所】に至るまでのいかなる戦場であれ、そこで行われた、敵の交渉相手との不愉快な取り決めを維持するために手にした葉巻のパイプを、いつまでも思い起こさせるものであった — を手にして姿をくらました。一方この哀れなディラニーの方は、誰かが残した炉格子とともに取り残され、何気ない顔をしてはいたが、無数のプラム大のかすり傷を受け、それに加え、

尾骶骨にれっきとした打撲傷を負い、こうした身体中の怪我に見事に耐えながら、アイルランド警察官に軍隊式の敬礼をしつつ、出来るだけうまく、ダフィー閣下【アイルランドファシストの団体であるブルーシャートの指導者】に関しての経緯を、驚きの目を見張っている鑑識係に報告し、その際次のような筋の通った願望を口にした。すなわち、極めて満足すべき交渉結果と、その後の紳士の協定のことを高貴なるローマ人として再考してみると、自分の特性である真面目さの大なる証拠である自分の顔一面が、赤く対角線状に交差した、非胎児性哺乳動物の血で覆われているが故に、ヴィカー通りの最寄りの交番から、寛大なる処置としてケシの蒴果のローション、あるいは湿布を持ってきて、患部に塗ったり張ったりしてもらいたいということ、そしてまた、自分は自己防衛を行ったために鼻や唇や耳や口から血を流している（止血せよ！）が、一方自分を攻撃した者の髪の毛は、コルト拳銃を使ったためにそのクヌート人（クヌート人）のような頭から一部はがれ落ちてしまった、とはいえ、そのようなことがあっても、自分の健康状態は全体的にマアマの状態のように見える、というのも、最も幸運なことに、自分の206本の骨と501筋の筋肉のうち、彼女からの打撃で少しでも悪化したものは1つもなかったと分かったが故である、というものであった。彼女って誰だろう？

では次に、トネリコ材や筋肉や土壌から生じる物質の除去のための真鍮製機具や、雲母の破碎のための結晶体岩石に、衝撃音を出させたままにしておきながら、しかしながら徐々に、私たちのためにダブリンの石柱や銀行から何マイルも離れたところを流れている母なる川の方角へと戻り（何と第11代王朝になるまでオリンピックは続けられ、あの重い病にかかった第32代のハムレットに到達するに至った）、また、法に背いてボナパルト【HCE】が、穴のあいた炉格子、間に合わせの炉格子を手に入れた問題に戻ると、この私たちの祖先であるドン・デ・デュネリ氏【Dan Donnellyは19世紀前半のアイルランドのボクサー】(85)

（彼の船がああ川の底に深く突き刺さりますように、彼の乗員乗客が海の墓場に閉じ込められますように！）の政治的傾向、及び彼に対する市当局の尾行についてのより顕著な点が浮かび上がってくる。紳士の皆さん、【尾行した者の報告によると】彼は他の男と間違えられ待ち伏せされ、かろうじて何事もなかったものの、即座に彼を撃ち倒そうとしたユグノーの罵倒者によって、ピーター・ウィズ・ペインター【ピストルの名前】で風穴を開けられそうになった時には、淑女の皆さん、自転車やオートバイも通ることが出来、散歩も出来る、今は一般に開放された墓地の小道の1つ、ウェリントン・パークの道を、小脇に留めぐつわ、すなわちクウェーカー教徒のインチキナ薬【経典】を抱え、血に染まった手にアルペン用の杖を持ちながら歩き回ること（少年たちよ、骨の髄までイギリス人になれ、チャンスが来たら仲間も捨ててしまえ！）、平和な臣民が持つ、不可侵の主要な自由の権利の筆頭条項を、脇目も振らずに

行使しようとしていたというのだ。つまり、切羽詰まった状況での至上命令の権利の行使、すなわち**一般人民の法**第2項に書かれてある権利の行使（意志を通そうとしている男を阻止しないように注意せよ）、誰の邪魔もする意図なく、怒りの感情を剥奪された鳩と、恐怖を駆り立てるボアコンストラクター【蛇の1種】に感謝と賛辞の言葉を送りながら、そしてまたなおさら一層、他の人々の運命の移り変わりを自分が体験していることを大いに喜ばしく思いながら — 実際彼はそうであった —、公衆に関わる主張として、あるいは自然の声として、公衆便所の便座の上に席を占めようとする権利、すなわち、ダブリンの数ある橋の中で最も東寄りの（しかしすべては西【死】へと向かう！）バット橋のそばで、尻をむき出しにする権利を行使しようとしていたというのだ。

しかし、大西洋とフェニックス・パークの件に戻ろう。誰にとってもこれまでの【ケイトの】話では十分ではないように見えるが、しかしながらあつてはならない犯罪についての謎を解く上で、いくらかの進展があったのだ。この場合、長い家系史を持つ、名誉あることにタール産業と羽毛産業とに関連のある家族出の、マーン【ゴルウェイ州の村、殺人事件で不当な裁判が行われた】生まれのフェスティ王、悪名高きウィスキー密造地域の中心部にあり、ロマンシェ語が話されている、古からある「サクソン人のメイヨー」【メイヨー県にある7世紀の修道院】で説教を行ったことのあるこの王は、2つの訴因を相矛盾する形で組み立てた（昼夜平分時見方からすれば、一方の人物の生き霊が、他方の生き身の人間となっている）起訴状の下、3月1日にオールド・ベイリー法廷【ロンドンにある裁判所】に連れ出された。すなわち、野において彼の作業ズボンからモリ鳩を取り出したということ【排尿】、また野においてカー杯顔のみだらにしかめた【排便】という訴因である。開廷！ 開廷！ この囚人はメタノールに浸った状態で、被告席に姿を現した。明らかにアンブロジーアを飲んだことを具体化した様子で、カーギー織り【厚手の毛織物】のコールテンを戯画風に着ているように見えた。この服がシミや裂け目やつぎはぎとなっているだけでなく、シャツ寝間着、ストロー色のズボン吊り、暴風雨帽、警官が着るような螺旋状にねじれたズボン、こうしたものすべてが尋常ではないように見えた（というのも、その時までには彼は、自分の仕立て屋に作らせたウェールズ人が着る服を意図的に破いてしまったからである）。(86)そして彼は自分が排除されていることに関して、王国アイルランド語彙集の中の花言葉を添えて次のように証言した。自分が自身の心に火をつけようとしていたその間に（事実、冷たい雨が嫌で、もろ肌を脱いで土鍋1杯のビールを求めるとすぐに、彼自身でも分かっていたことだが、彼はビールの雫を落としていた）、三つ揃いのスーツを着た誰もが、そしてまた過剰なほどの数の警官が、【追放された】アダムとイヴを具現化した者のように、全くどういふわけか自分から離れてい

ったのだ、と。そしてこうした時、国家権力（ロボット巡査）によって次の事柄が明らかにされようとした。それはかつてメレク【ヘブライ語で「王」の意味】として知られていた王、**別名クローバー**【「かなてこ」の意味】が、変装する上での最善の方法として、クロンターフの不純物のない泥炭とともに、洪水で運ばれた泥炭の塊を顔や頬や口に擦り付けて、ムーア人の煙突掃除人の小僧に扮し、ペテロとパウロの祝祭日の木曜日に、マッドフォード【英国サマセット州の村】で開かれるミドル・ホホワイト【豚の1品種】の市に、彼とアントニー【聖アントニーは豚番人の守護聖人】が電話帳から拾ったタイキングフェストとバロックという偽名を使って、人の話によると、純血種の豚（無認可）を連れ、ヒヤシンスを持って出かけていった、というものであった。彼らは999年間アイルランドの平地のそばのあの海の上のみにいた。彼らは屈することなく、絶えず權を漕ぐのをやめなかった。そしてついに彼ら2人と半人は上陸し、ラクダやロバ、白い口髭を生やした老人や乳飲み子、司祭や貧乏人、既婚婦人や道化の中を歩き、巨大な渦の中へと進んでいった。この集会はアイルランド農業団体、牧畜団体が開いたもので、アイルランドの豚が、その兄弟であるデンマークの豚をまともに見る一助となっていた。また人々が騒いでいるために、数多くのキリスト教徒、及びユダヤ教徒のトーテム像がそこに出席した。そして人々が殺到しているにもかかわらず、この集会は明らかに締まりのないものであった。こうした時、この親分【フェスティ王、つまりHCEのこと】は懸賞試合の闘鶏が原因で戸口の一部を壊してしまい、後になってこのジプシー【フェスティ王、つまりHCEのこと】は、借金を払ってくれるこの紳士【豚】を、つまり、彼にとって何の利益も出なかったバリーブリッケン【本来はリムリック州東部の町。この場合はそこで育成された豚のこと】を、6ポンド16シリングの未払い金をヒッサリク【トルコの都市、トロイ遺跡がある】で支払うために売ってしまった。というのも、彼女が、つまりフランシー【豚の名前】の妹が彼（この動物）の、「取っ組み合い通り」にある汚い小屋「**こちらトロイ**」の至るところを荒らしてしまったからだ。こいつは【豚のこと】こののらくら男の借用物ではなかったのだ。

注目すべき証言が、やがて、ある証人の目と耳と鼻と喉によってもたらされた。メソジスト派のチャペル【トイレ】の常連は、この証人がメディカル・スクウェアの00【トイレの隠語】にいる平服姿の司祭W.P.ではないかと思った。彼はグリーンピース入りライスの会食用の食事を済ませると、すぐに帽子をかぶり、尋問を受けている間はあくびをするな、と厳かに戒められ、(87)微笑み（今朝家を出る時、モルロー夫人から縁まで注がれたグラス1杯の酒を受けてきたのである）、セイウチのような髭を生やし、北部の方言で（何ということだ！）尋問者に対して次のように証言し始めた。自分はこの時旅行者向けのpapで寝ていた。そして、11月5日【1605年のこの日、テロリストのガイ・

フォークス一味が議事堂爆破未遂で捕縛されたことを祝うイングランドの記念日】を記念して、騒ぎに加わるつもりだよ。喧嘩好きだもんでね。あれはジュノーの記念祭や昔の贅沢な日々とともに、今日、昨日、明日を皆一括りにした汚らしい歴史の日めくりに掲載のようなものだった。「雨降り師」のオジサン【ジュピターのこと】も喜ぶだろうよ。サムとか自分とかモファットのような、特にこうした非常に当てにできる観察力を持った人間にとって何より印象に残ったことは、とはいえ、その彼らの観察力がその理由とはならないのだが、ただ1つ、驚くべきことに、夜のこの時間帯に、次のことを見、聞き、味わい、嗅いで、茫然自失してしまったということだ。つまりある種の好戦性を持ち、人物評価書にトラブルメーカー、虚飾文章家(田舎っぺにはゲール語で)と書かれた、学位授与者のヒヤシンス・オドネルが、フェアグリーンにおいて24時に、別の2人の老国王ガッシュ・マック・ゲイルとロアリング・オクライアン・ジュニアから、彼1人で金品を奪い、彼らを殴り、刺し、惨殺しようとしたのだ(墓場での好戦性)。この2人は2人とも取り替え子で、居場所が特定できず、住所不明で、リュイスの協定【シモン・ド・モンフォールとヘンリー3世との間の1264年の協定】の前に一発かましあって以来、ずっと彼と彼らの間にはやりとりはなかった。彼と彼らの間には、ポーア人がイギリスに侵入したが故にか、あるいは当初彼が髪を2方向に両極に分けていたが故にか、あるいは彼らがある三文小説に出てくるウェイトレスを出しにして、這うほどに泥酔した状態で夕食をとっていたが故にか、彼らがミース【ミースはアイルランド東部の県名】と言えず(口と耳の不自由な者の住むところ)ミーズと言っていたが故にか、不和が生じていた。また訴訟関係者たちは、つまり地元の王の臣民たちや広大な世間の人たち、アラン群島やドーキーの王たち、マッド群島やトーリー島の王たち、そしてキローグリン・フェアのヤギの王【キローグリンはケリー州の町。当地ではオスのヤギは8月のフェスティバルで冠を被せられる】までもが、彼は蝶形リボンを紐で結わえた、本物の人参のように赤い髪の、深紅のペチコート揺らしたり、イソッズ・タワー【17世紀後半までダブリン市内に建っていた、デー人(ダブリン)の愛人が住んでいた塔】のてっぺんから叫んだりする、他よりましな女どもの取り巻き連中にたぶらかされていると言っている、と証言したのだ。【この時】法廷内にいたある集団、ダブリンのボアーナブリーナ【ダブリンの1地区】のダブリンっ子から叫び声がした。ミック、お願い、バナガー【オファリー州にある町】からの胴元に気をつけてね！ オドンナーを出してよ！ エーッ！ 彼のアレを見せて！ ブー！ もっと舌を使ってよ！ 唇はそれほど使わないで！ この死者のいる、暗い舞台面となった法廷において、この無神経な証人への反対尋問によって、幾多の晩の中でも特にあの晩、3人の伏兵が置かれた時には、そしてその場所では(88)(大雑把に言えば、主要な緑地の

高台にあり、その土地全体でただ1本のリンゴの木があるストップ・アンド・スィンク近く、ウォーターハウス【ダブリン市内の貴金属・時計店】の中央ヨーロッパ時間で、夕暮れから夜明けまでの間の約30分間)、子供の祭壇を仄暗く照らすほどの光も、ポツンと残った月から差しはなかったことが明らかになった。そこで、このトラブルメーカーに対しては、ぶっきらぼうに、おまけに最も基礎的な点がもち出された。つまり、あなたは、耳に聞こえる、目に見える、直観しうる、食しうるこの【現実】世界の存在が意義あるものとなっている幸運な仲間の1人なのかという内容だった。自分は、そのことについては、まさに経験的知識に基づいた、意欲的な、黙想的な思考の結果、その通りだと確信している、というのも、自分は、最も意義深く、生き、愛し、呼吸し、眠り、また音楽を聞くことで賢く肉体を形成させており、考える時、見る時、感じる時はいつでも、【現実世界のベルが鳴るように】ベルの音を切り抜いて取っておく装置を作った【条件反射のこと。パブロフはベルを聞かせて、犬に唾液を出させた】からだ、と答えた。あなたはまた実際、彼の王という仕事、及び仕立て屋としての仕事で用いられる名前が、虚偽の名前であることも、そしてまた真の名前であることもはっきり認識しているのか。特にその通りである。満足しているか。キャッドがおそらく満足している程度に。嘘をつくな！ 1人になったらそうする。あれはモーバス【morbusは「病気」の意味】か誰かだったのか。全くその通り。水曜日に生まれた息子だったか【童謡、Monday's Childに「水曜日に生まれた子供の心は悲哀に満ちている」とある】。結婚式におけるサテュロス【ギリシャ神話中の酒と女が好きな半人半馬の森の神】だった。それでこの嫉妬深い氏はどのようにして学位に到達したのか。選挙人名簿に載るように。巨大な奇妙な目と、大きな花のような耳と、共生動物が持つ鼻と、ねじ曲がった人を裏切る口を持ったつむじ曲がりの策士なのか。おそらく。あなたを襲って、徹底的に打ちのめすことが出来るのは誰か。左にも右にも。主要人物の中にはうんざりするような人物もいたか。その通り。転びやすい足を持ち、名前を変えたヘルミンガム・アーシュイン・ラター・エグバート・クラムウォール・オーディン・マクスィムス・エズミ・サクソン・イーザ・ウェルキングトリクス・エーセルウルフ・ラブレヒト・イドワラ・ベントリー・オズマンド・ディサート・イグドラシルマンもいたか。あの人物は不滅そのものの神聖なる聖エッフェルであった！ もう1度、それは沈黙してはラッパスイセンを愛で、また沈黙してはラッパスイセンを愛でているチャドリー・マグナル【シャルマーニュのもじり】であったか。【答えはなし】2人の子供のスパイが葉陰から彼を値踏みしていたが、3人の邪な暴露者のいる森林から、彼のフロックの裂ける音が、ほんの少し確かに聞こえてきたと、あなたは言い切れるか。もちろん、シンバルのような音が聞こえてきた！ 彼はヴァイキングの何とかいう者の1人

だったのか、エッ、どうなんだ。またロングのゴボゴボ流れる樽に、アイルランド — 苦痛 — 1つ — ある、と奏しながら、恵みの泉を出すこと【排尿】で気分を新たにしたらか。エドワード卿【アイランドの反乱者】がいなかったならば、また外科のフィリップ閣下の注水【彼の像には水呑み場が設置】が欠けているならば、ポーター【黒ビール】を賛美しながら、ファイブ・ランプ【ダブリンのノース・ストランドにある五叉路】で、ガラガラ音を立てながら、ビールの泡をもっと吸うことが出来るだろう。処女マリア【売春婦？】とは、自分の人生はそうはならないであろうが故に、彼の一生をダブリンの暗いため池に残してしまう者たち。しかし言うまでもないことだが、時間があつたら彼は自分をテム【エジプト神話の日没の太陽神。しばしば世界の創造神と見なされる】とでも呼べるであろうか。確かにいつでもそう出来るであろう。彼が喜ぶのはいつか。(89) 1着になった時、そしてまた3着以内に入った時。証人でもあつたこの機関士を困らせようと、液を滴らせること【排尿】で、釜焚きの機関助手をイブたちは誘惑したのか。聖なる神の化身め、一体どうしてあんなことをあいつらは思いついたのか。同じ夢を見る双子なのか。そうだ、間違いない。2人とも1対のヒラ豆のようにそっくりなのか。まさしく。だから彼は民衆の面前で民衆から追い出された、そうなのか。当局によって追い出されたのだ。一般原則としてあの王子は自分を露出すべきではないのか。何を知りたいのかね！ ロシアの同志なのか。まもなくガロウェイ【スコットランド南西部の地方】人になると彼は言うだろう。公正なる証人として、酔っていないことはないか。大量の酒を飲んでいる。彼がタバコを吸うかどうかを彼女が気にしていたかどうかを尋ねたか。もし彼が咳き込んで痰を出したなら、そうはしなかった。彼がコルシカ人のローンに向かって大声で叫んだことについてはどう思うか。あれはいつものことで、再びもっと声を荒げ罵って叫んでいた。あの上品な女性に分別があることは、我々は疑ってはいないが、あの狡猾な女の黄色い水はどのように変わっていったのか。いつもの通りであった。疑わないでくれ！ もし持っているなら、彼の宗教についてはどうか。また日曜日に教会で会いましょう、という程度であった。男色家の洒落男であることは、彼にとってまさにどういう意味を持っていたのか。フン、四旬祭の時自分のために祈りを捧げていた豚紳士であるに過ぎない。中流階層に属しているのなら、ドアを食い破るくらいが、通常の人でなしぶりだったのか。夜になれば、財産を奪われた者に対してゲロをひっかけるくらいの有用な人物となった。彼らが軍法会議を開くことを、彼は認識していたのかどうか。数ある日々の中でもあの日、彼は認識していた。ロンドンデリーであれ、ヨークであれ、スケリーズであれ、門のない耕作地の綴りを言ってみよ。ヘリオトロープ咲一滴雨無圃地。誤った解釈をされていない限り、飼っている山羊に一定地域の草を食ませる権利(規律励行夫人)は、その山羊の雄

親が死んだ時に消滅してしまったのか。まさにお偉い人物にこのことについて話すことは彼には出来ないであろうが、彼の義理の母親は棺桶の値段についての交渉方法を知っていたし、彼女ならば彼らホイッグ黨員にも物申せる、時代の先を行くヴェロシピード【地面を蹴って走らせた初期の自転車】であると、彼はその場で彼らお偉いさんたちに言った。考え深げな顎づかいで、とりとめのない話し振りだったか。発音については、なお一層秩序だったものであった。分流の末端ほどに細かいところまでそうなのか。我々はそれを推奨している。なぜ山羊【好色漢のニュアンスがある】なのか。無回答。急いであなたはどこから来ようとしているのか。．．．。イヤ、全く。火山の端にいて目眩がしないのか。まさにその通り、実際にしている。それで彼は何歳でどれほどの変人か。彼はブル語【セネガルの1民族ブル族の言語】を習うつもりだった。2枚のシュミーズを表す短いオガム文字【古アイルランドの碑文用文字】、息子を表すオガム文字、あるいは上向きの線で記されたフィンを表すオガム文字、頭3つが数えられる若者たちを表すオガム文字、意味を持っていたのはこのうちどれか。太陽が顔を出している中での茂みの下の太ももの間の頭部は、蛇を誘惑し、ヒースの中で無数の民族を生み出すであろうという意味になった。腕と鳥と色合いと聾啞を表すオガム文字は、おそらく消えていないのではないか。確かにその通り、手を使って表現した【オガム語は1種の手話】人物であるジョタルフェーンもまた消えてはいない【ステュアート・マッカーリスターの『アイルランドの秘密の言語』には、「アイルランド語やオガム語のアルファベットの文字の名前が、その単語の中のある文字の代わりとなった。あたかも何らかの理由で不可解にも、Iasonという人物のことに言及したいと思ったギリシャ人が、彼をIot' alphasonと呼ぶようなものだ」とある】。補足語を使えば、変にセンチメンタルな人物ということか。猫に尾があるのと同じくらい確実に、司教の叙階にいる人物だ。それは実に素晴らしいことではないか？ 実際、まさに！ しかし孫文氏よ、ここにハンカチがあるが、(90)それを発音する上での第2声【中国語の4種類ある高低アクセントのうちの1つ。上昇気味に発音する】は何故生じたのか！ 殴打され皮のむけたボクサーのような顔ようになるまで叩頭の礼をしたからだ。それ故、この太陽中心主義者【神話を太陽と結びつけて論じる者】は、賭け率を同額賭金【すべてのレースで1番人気の馬に同じ額の金を賭けること】に設定することに挑戦して、労働者階級の【競馬の】ライターから称賛を受けたのか。それによって、このゲームをあまり好まなかったトッドとダイクとハリーの機嫌が悪くなったのだ。【出走時の】旗の振り落としから出走馬掲示前の賭け率提示までの間に生じたことが明らかとなった好戦性に関して、キングズ・ヘッドからリパブリカンズ・アームズへと居酒屋を変えつつ、くすんだ星々と遅滞した朝のゼンマイ仕掛け【目覚まし時計】だけでなく、時

いた格好で、キャッスルノック【フェニックス・パークの中にある丘の名前】の出演者は、ごちなく神聖なる彼の手を挙げ、ローマン・カトリックの信仰のしるし【十字】を形作ろうとした(イエス・キリストよ！ — この男は興奮のあまり権威あるカスティリャ語【標準スペイン語】を打ち壊した。(92)そうした状況の中で、傍聴人は彼を腐ったシチュー【元来はオジャポドリダという豚肉と豆からなるスペイン風シチュー】として虐げ追い詰めた)。するとすぐ様、ホールにいた自宅所有者たちのあちこちからドッと笑い声が起り(ハ！)、メセグリン【ウェールズの蜂蜜酒】によって心を和らげていたこの証言者も、気が進まないながらも、ただただ非常に女っぽい品の悪さを見せながら、この笑い声に加わった。(ハ！ハ！)

大酒飲みのワインドアップ【ショーン】の陽気さと酔っ払いのピンター【シエム】の陰気さとは相対立するものであるが、前者と後者それらは、その対立化と同じくらい巧妙に、対立するものどうし同一化をなしている。この同一化は、あなた方も持っている、ただ1つしかない自然力、精神力によって進化したのであり、諸所にその現出が見られる。そしてその自然力、精神力はその諸所における現出の唯一の条件、あるいはその現出のための唯一の手段となっている。またその同一化は、【元来は】2者の相克の融合性による再統合のために両極化されている。彼らの2つの宿命も顕著に異なっている。一方、バーのメイドたちは(30-2人、恒星月の人数)、春の花々が「郵便配達人ショーン」とつぶやくと、喜んで押し合いへし合いされている者【ショーン】の周りを飛び回り、褒め称えた。そして、とても素敵な好色漢に彼を任命し、魅力的な若者と賛辞を贈り、彼が周りに思慮分別を利かすと、彼の巻き毛(アア、この感触！ この香り！)にヒヤシンスの花を挿し、キスを彼の頬に送り、彼女たちの男性にアイルランドの薔薇(その素敵な色合い！)を贈り、彼のために素敵な新しいネクタイを結んでやり、おいしい砂糖入りキャンデーを与えながら、ゴリウオグの人形を「私の金髪の、可愛い、飛んで走る郵便配達人」に指でつまんで渡し、疲れを知らない若い女性たちは全員生き生きとし、今を盛りに大いに楽しい時を送ったのであった。アーメン。しかし次に次のことがまさに観察されたのだ。皆が彼を崇拜している中、どういうわけか、その場にいた者のうちの1人が、全員の中の1人が、「月のシスター純潔クラブ」の代理となつて、彼を貶めようとしていた。それはたった1人皆から離れていた、愛の表情を浮かべた、躍動的な、マギリカディーズ・リークス【ケリー州の山並みの名前】のジェンティア・ジェンマ【日本語化すれば「リンドウの宝石」。この場合はイシーのこと】であった。この時彼は、純粹な賞賛の気持ちで顔を青くし、理性を失い、押し黙って、体裁に構わず、ごちなく、相溶け合う輝きの中で、彼女の微光に入っていく羞恥の中で、彼を圧倒する彼女への愛に心を奪われていくように思えた(若く、美しい彼は彼女の男なのだ。彼

女は彼を手にしたら、彼女のママに知らせるだろう)。そしてついに、妖精としての彼女の荒々しい願望は、彼ショーンの深い闇の奥底へとまさに音楽的に溶けていった。

そして一方4人の裁判官ウンティアス、マンキアス、ブランクフス、ピラクスは、ぼんやりして(というのも、結局それをまさに引き起こしたこれというのは、単にそれが生じさせていたことの結果ではなかっただろうか)カツラを1つにまとめておいたのだが、(93)行った立派なことと言えば、ノランズ・ブルーマンズ【フェスティ王】に関して不変の評決を言い渡すということくらいであった。それによって、知り合いのすべての英国人を殺害した王は、ポケットを空にすると、そこに何も入っていないチュニック【軍服として着る上着】を引きずりながら、無罪の状態で裁判所を急ぎあとにした。そしてそうだったが故に、自分が真に上流階級の間人であることを証明するために(面白いでしょう！)、ズボンの目隠し用のつぎはぎを見せびらかしていた。このスイス教皇護衛隊員の、教皇庁といえども宮廷風の見栄えに対し、高貴なる紳士よ、今日のお身体の調子はいかがでしょうかと【誰かが呼びかけた】。するとこの大酒飲み(我々はこの男の受けを狙ったたわ言や言葉遣いに対し、心の準備をしてはいたものの驚愕する羽目となった。そしてバーナーから出るガスの悪臭のようにそれを感じている)は、トマス・アクィナス的人物さえもが持っている、ブリキでできた胃から発せられるような、42年間放置された生ハムやなめし皮から出るような、ワインの悪臭を漂わせて返答した。それ故30マイナス2人の支援者たちは、全員声を響き渡らせ、弁論趣意書を引っぱり上げながら、戦争の時に出すような声で「

シャ ン ザ バ ン マ ン
あの土方の旦那を遠ざけて下さい！」と叫んだ。そして無事何事もなくこの女性的な教区の気取り屋(よく彼はそんなことが!)は、女性の援助贈与者に大いに感謝し礼の言葉を述べつつ、その場から直ちに真っ直ぐ家に、つまり「薄暗い酒瓶の住居」に向かい、介助者の手を借りつつ到達した。そしてそこに(というのも、彼は真の鹿たるエサウに似て、本質的に鹿のように臆病だったのだ)彼は閉じこもった(動物園だ)。泥だらけの囚人のように。そして実際彼はそうであった(債鬼め!)。その間貞節を重んじる教会の鐘は一斉に次のように叫んでいた。お前及び、我らの父に対するお前のゴミクズのような口達者ぶりよ。そしてこう怒鳴っていた。恥を知れ！ 恥を知れ！ 恥を知れ！ 恥を知れ！ 恥を知れ！ 恥を知れ！ 恥を知れ！

そしてそうした状態ですべては終わった。上首尾、喜び、任務の遂行、啓発といった状態で終わったのだ。こうした結末の原因についての手がかりは詩に求めよう。そしてそういう状態の中で、誰もが人々の不平不満を耳にしたのであり、すべての人が人々の称赞の声を聞いたのだ。手紙だ！ クズのような手紙の話に進もう！ そしてそれは早ければ早いほどよい！ 鉛筆と化した眉墨で引かれた

眉についての、ペンと化した口紅で書かれた手紙だ。単語を借り、問いを投げかけ、人の文章を盗み、石鹸のように話を滑らせている。黒髪のラザ・レインからは嘆息と涙とを、レズビア・ルーシーからは目の光を、独りぼっちのクーガン・バリーからは矢のように心を突き刺す歌を、ショーン・ケリーのアナグラムからはその名前への羞恥心を、「私はサリバンだ」からはあの甲高い足音を、苦しむダブリンからは踏み越し段【牧場などにある家畜を通させないための階段】に座ることを、キャサリン・メイ・ヴァーノンからはおそらく相当なものと思われる努力を、フィルザポット・カランからは彼の我が愛しのスコットランドの愛人を、賛歌作品番号2「フィル・アドルフオス」【「恋人である私の兄」の意味】からは、倦み疲れた時のオー、疑い深くなった時のオーを、「君と同じ」のサミュエル・リーヴァー【サミュエル・ラヴァーはアイルランドの作家】、あるいは「この野郎」のダニエル・ラヴァーからは、あの愉快な老いた意気地なしを、あるいはあの退屈した散歩者を、ティム・フィネガンの無力な一族からは、彼の精神を呼び覚ますだけの力の欠如を、(94)女の子同士の芝生での結婚式からは、男性同性愛者の偉大さを、パル・マレンヤトム・マロンやダン・メルドンやドン・モールドンからは、マルドゥーンがモアテ【ウェストミース州にある町】でする、表面のなめらかな杖を使ったピクニックを【それぞれ借りてこの手紙は書かれた】【look like Muldoon's Picnicは、「至るところが汚れている」を意味するフレーズ】。この手紙は、彼の汚れた女によって救われた頑健な男についてのものだ。口なめらかに冗談を飛ばす男の話だ。山頂で囁くこの楡の木は、傷つき嘆き悲しむ石に語ったのだ。風がその語ったことを漏らした。波がそれを運んだ。葦がそれについて記した。馬丁がそれを持って走った。手がそれを破き、荒れ野は戦闘状態となった。雌鶏がそれを取り戻し、苦境が平穏を誓約した。それは巧みに畳まれ、罪が中に入ったまま封印され、娼婦によってくられ、子供によって解かれた。それは人生ではあったが公正なるものだったか。それは自由に書かれていたが、芸術作品であったか。丘の上のその老いた男が完璧なまでにそれを読んだ。それは母親を陽気にさせ、イシーを大いに恥ずかしがらせ、シエムから輝きを奪い、ショーンを恥辱へと陥らせた。しかしウーナ【アイルランド語で「空腹」の意味】とイータ【アイルランド語で「喉の渇き」の意味】は【手紙の中に】喉の渇きとともに空腹を見出し、主任司祭代理のアグリッパは、彼の悲歌の中で、三重苦を綴っている。アア、果実を恐れよ、臆病なダナイスたち【ギリシャ神話中のアルゴスの王ダナオスの50人の娘】よ！ 1個のリンゴ、私のリンゴ、女は自由だ、そしてまるやかでもある。2人の女は自由な時にまるやかなのだ。そして我々は非常に深い憂いを抱えるのだ！ アーモンドのような目をした1組の追従者と、1人の老いたロブスターのようなずんぐりしたドテカボチャと、狡猾な道を歩んでいる3人の干渉者たち。

このような具合で彼の敬虔なる息子の罪から、ある都市が興ったのだ。ゆったり座りながらも次々に。フィンよ、フィンよ。楽しく面白く。サア、教えてくれ、教えてくれ、教えてくれ、次を！

それは何だったのか。

A !

? 0!

マア、諸君がご覧のようになり、また登場人物も以上のような次第となり、彼らとともに4人の判事はすべてが終わって、再び彼らの王座部監獄【ロンドンにあった債務不履行者を収容した監獄。1843年に廃止】である記録保管室の中の、秘書官ラリーのいる判事控え所に備え付けられた、昔ながらの伝統的な法のテーブルの周りに座り、幾多のソロンのような名立法者たちのように、前と同じく再びこのことについて話しあった。完全に偏見にとらわれない裁判について。統治者たるこの王のことを。共犯証言【検察官の約束を受け、起訴を免れる目的で、犯罪者が共犯者に関して行う証言】に従ったことについて。神に誓って宣誓することに関して。「祝祭」と「どんちゃん騒ぎ」と「リンドウ」と「ベッツィー・ロス【星条旗を作成したとされている女性】のような鉄面皮の女のベチコート】【4博士】は。そして1本のドクムギ【ロバ】のことを忘れてはいけない。彼ら4人と法廷への謝意は最早存在しなかった。だから豪華な時間のためにポートワインを渡せ。それならそれで仕方がない。アア、どうだ！ それで君は覚えているかね、「悪しき父親シンドバッド」、又の名を「偉大なる呼び方不詳」、昔からのあだ名は「汚い父親パンタローネ」、専売独占業を営み、2本の薔薇が戦いの背景をなし、シャーマン的な司祭である勝利者ミカエルが関わった人物、(95)教皇と老いたミノス【ギリシャ神話中のクレタ島の王。死後は冥界の裁判官】とヨーク大聖堂の特赦を得る前のこの人物のことを。私が気にしているかって。私の気に障るのは、貿易風が吹いている日に漂ってくるバリーポー【ダブリン北東部の都心区域】の肥やしの仕事の匂いのような、あの男から出る匂いだ。そして彼をからかい赤面させ、彼にいたずらをするグレイス・オマリー【16世紀のアイルランドの女海賊】やオプラインニーのような品のない少女たちも嫌だ。今日は体の調子はいかが、北の旦那さん。私の邪魔をするなんて！ あら、ごめんなさい！ 湾を越えて行ってしまったわ。誰かさんと誰かさんが出会ったら！ アア、神よ、南方のすべての鳥たち、ジミーとかジョンとか、彼らの憧れの離婚したミンクシー・カニンガムの後を追って彼女の恋人になろうとしていた時、何故彼は百日咳の兆候を起こしたり、酔っぱらって死ぬほど咳き込みながら、あの古いガスメーター【自分の口臭】を気にかけていたのだろう。待て！ 我々の島には他に3カ所、コルクの浮きを設置すべきところがある。もちろん私がうまく彼H₂CE₃に、その臭いが町のみなの息を止めてしまうと伝えてやってもいい。神と私だけが、私自身のことと同じくら

いに彼のことを知りすぎるほどによく知っている。つまりどうやら足が悪いらしい彼の馬に胡麻の種の入った袋を担がせて、ハアハア言いながら、この白い目をしたカフィール人【一般的にはアフリカ南部の黒人のことだが、特にイギリスのミュージックホールの芸人D・H・チャージンを表す】は、キー・ウォールを、32番地を通り11番地まで歩いていた。そしてザーメンのような臭気とその臭気に彩られた声を発しながら、ひどく大きな茶色い安物の煙草の煙を吐き出していた！ ネエ、お父ちゃん！ お人好しの人物の金髪の子供であることを、僕が喜んでいて思ったんだね！ 素晴らしいことだ、と彼は言う。ありがとよ！ さよならね、と私は言う！ アア、そよ風が！ 誰よりも長く私はこいつの匂いを嗅いだのだ。これは私が西部にいて、祖父になった時【孫ができた時】のことだ。彼女、赤毛の女の子と私が、シカモア・レインで初めて夜を一緒に過ごした時のことだ。我々はタンポポの花々の中、ひんやりとした紫色の欲情の黄昏に包まれ、はしゃぎながら、楽しくおさわりの遊戯【セックス】をしていた。彼女が言うには(私のことを言ったのであるが)、私の草原の香りは、彼女の地下の火を消したのだ。そして私はあの大きなビール会社の質の悪いビールとのお付き合いを発展させるよりも、君の純粋な山の草々の露をありがたくも一啜りしたかったのだ。

そしてそうやって、この4人の酔っ払いの年代記編纂者は、ずっと、これまでになく、再び長い間議論を続けた。彼女の以前の誰かさん及び彼のその後の居場所と自分たちとの関係について、ずっとずっと遠くで彼女の姿を見失った経緯について、彼が近くの【川の】深みにはまって死んでいるのが見つかった経緯について、せっせと働いたこと、ペチャクチャ喋ったこと、苛立ったこと、ガミガミ言ったこと、ため息をついたこと、喘いだこと、泣き喚いだこと、そして(シーッ!)春に別れたこと、そして(君もそうした!)ボイコットしたこと、醜聞を広めたこと、当時(起こった)純然たる戦いのこと、生き、死にそうになり、価値判断をし、ナンズベリー広場で乗りまわしたことを。そして茂みの中のすべての蕾のことを。(96)そしてその笑っている雄ロバも。よく聞け！ よく聞け！ よく聞け！ その薔薇は暗闇だと白くなるのだ！ 公園にある薔薇につきまとった結果、鼻がサイの鼻になった奴がいるのだ。そういう訳で、すべての悪道は押韻に通じる。そしてリル・トリル・ラ・パ・アン・ヒル【"Lille Trille laa paa en hylle"はノルウェイの「ハンブティ・ダンブティ」に似た童謡】についてとか、9着のコルサージュ【婦人の胴着】を持っているニール【「9虜囚のニール」は4世紀のアイルランドの王のこと】の夫人のこととか、彼らの祖父である老いたマルケ王の話とかについて、酒を飲みつつ互いに否定しあいながら、それに、本当に、男らしい男の中には侯爵となっている人物は全くいなかったとか、噂の種となっている変人の親愛なる鎧を身に付けた恋人氏【ト

リスタン】のこととか、チャペリゾッド近くの古い家のこととか、彼ら4人が昔ながらにミルタウン公園で【ジェズイットの研究施設がある】、ハンサムなウィスパラー神父の下で静修に入ろうとした時よりずっと前には、あらゆる事態が確かに非常に間違った方向に進んでいたとか、彼女は花言葉を口にしながら、彼のあれを使ってセックスするのだとか、彼女の身体はお粥みたいに柔らかく感じられるとか、まさにあの娼婦たちは両方ともに、**我が愛しの若き小さな姉妹たち**ではなかったか！ それに(覗いてみる!)庭で排尿するのは最も不適切ではないか(小さい管から!)、チョロチョロチョロと、とか、お願い、ママ、男の子とイチャイチャしに行ってもいいでしょう？ お馬鹿さんの田舎者たちは馬丁を連れて出かけちゃったし、とか、いかにして彼ら【シエムとショーン】は彼女【イシー】を扱い、彼女をジッと眺め、彼女をリラックスさせ、彼女を抱擁したのだろう、とかを【彼らは議論していた】。僕は君とは意見が違う！ 自信があるのかね。すまないが、君の言うことは嘘だ！ そんなつもりはないよ。君は別だがね！ それでラリーは彼らにとっての平穩を妨害し続けているのだ。哀れなのらくら者のローリー！ ギブアンドテイクにしろ！ 過去はなかったことにしよう！ そうすればすべては忘れ去られるであろう！ アア、残念なことだ！ 彼女の親切の対象について、また、にににににににに人間が支配する時代の本来の形について言い争うことは、あまりにあまりに悪しきことだ。そうか、分かったよ。本当に。では、握手だ。それでもっと私たちに注いでくれよ。後生だから。そうならそれでよい。

それで？

それで、ぼんやりと星の配置を見ている者(天がこれを助け給っている!)が、天空にある未知の天体の全貌を解き明かすのと同じくらい偶然に、そしてまた、あらゆる人類の話し言葉(大地がそれを捕えている!)が、吃音のまねをしているひょうきん者の発話の語根から、計り知れないくらい深いあらゆる真つ当な意味をもつ言の葉を付け加えるのと同じくらい控えめに、このような明らかに秩序だった作り話をこしらえることが、真実中の真実を明るみに出す、そうしたことになるはずがたとえなにしろ、我らの精神病の専門家の考えによれば(全世界の判断は信頼できる【聖アウグスティヌスの言葉】)、このように死んだまねをすることで、我らの聖なる好奇心豊かな先祖様は、彼の子孫である諸君らに対して、また魅力ある相続財産共同所有者であり、彼の尻尾の1本1本の毛である我々に対して、最善のやり方で彼の尻尾を守り抜いたのだ。あらゆる種類の獵犬たちが、(97)全世界に声を伝える角笛をもって狩りに参加していた。強烈な臭いを手がかりに、何が何でも獲物の喉を噛んで振り回してやろうと、逃げる猶予を与えられた彼の後を躍起になって追っていた。足跡をも手がかりにして！ この動物、白きライオンの方は森を出て、マリナホップ及びピーコックタウンから、クリスマ

スの時期の温暖な「ハンフリーズ・チェイス」という教会領を越え、まさにタンカーズタウンへと進んだ。そしてこの動物をレーヴェンズマイル・フィッツ・アース氏所有のバセットハインド犬という勢力【狩りで鳥獣を駆り立てる人夫】は、初めのうちある種の熊と見間違えられながらも、この追いつめられたる者を走らせ、レイズタウンやホーロックスタウンを通らせ、宙返りさせ、また再びタンカーズタウンへと戻らせたのだ。相手をまこうとチーヴァーズタウンを急に向きを変えて走っている、よく聞こえる耳を持った野うさぎを犬たちは追いかけた。ロッホリンズタウンとナッツタウンを通して、牛の囲い地のところで彼らは嗅ぎつけた。しかし、見よ、好機が訪れ、ついに「轍の丘」のところで、普通よりも厚い綿入れの入った真冬用のコートを着ている姿を最後に、彼の姿は見えなくなった。大きなロングブーツを履き、走って北東にある自分の下宿屋を目指していた彼の姿は消えてしまったのだ。この時耳の聞こえない狐がとるような死んだ振りをして、奇跡的にからすに餌を与えてもらいながら、彼は森の中に身を隠していたのだ。そしてまた、こぶ胃、網胃、葉胃、皺胃に、シナモン味のシェリーの入った、固まったクリームが乗っているシラバブを流し込むことに支えられながらそうしていた。狐ルナールは助かったのだ。そういう訳で猟犬たちは急ぎ家に戻った。内臓を再訓練しながら持続力と忍耐力を持つことは、【彼を非難する社会への】反駁であった。そう反駁することで、かつて街路もできていなかった、未発達この街で、にかわ質の肉汁と格闘しながら【「グルー家やグラヴィー家と敵対しながら」の意味にもなる】食事をしつつも、彼は温泉に来るような者たちの束全体に、幾分かでも打ち勝っていたのだ。無意味な暴力や憎悪や罵倒は、ほぼ完全に、相手を攻撃することや相手の権利等を奪うこと、列車を脱線させることや橋梁を破壊すること、相手を激怒させることや相手の利益等を侵害すること、船旅中のムガールの偉人や下着姿の皇帝を苦しめることや彼らの人間性を踏みつけることに繋がっていくのだ。

しかし躊躇は人に害を及ぼす。ためらいは人を呪縛する。彼が受け取ったものは、ヘイヘイヘイヘイ、内気で不機嫌な、引っ込み思案のハンブティアー・ダンブティアーと同じように、灰のような、忍び笑いを誘う、擦れた、ポロポロの尻尾なのだ。

集まっている者たちは囁いた。ルナール【狐】は遅鈍だ！と。

彼の活動の日々を皆恐れていた。欠伸をしたのか。あれは彼の胃からだ。ゲップの音は？ 彼の肝臓のせい。プンとくる臭いは？ 彼が食ったものから。タラによる悪臭なのか。アア、何ということだ、奴を引き渡せ！ 【以下、裁判所から姿を消したあとのHCEについての噂が様々に語られる】フッガー家の広報部によると、彼は自らに鉄槌を下し、完全に体力を消耗して横たわり、体力と同じように心理的にもメランコリックな死を迎えたということであ

った。農神祭の三日黙想のために、彼の爺さん召使いが双子の息子たちを公共広場に連れて行っている間に、彼の女は娘を産み、(98)100名もの男たちと、ブツブツ不平を言っている女たちとによって、そのしわがれ声でのクリスマスキャロルの歌『ひいらぎとつた』でもって歓待され(ロンドン警視庁の話による)、そしてまた、ヤドリギによりその将来の幸福が推し量られた。大きな爆発音が響いた。その後広範囲に静けさが広がっていた。状況報告は、「沈黙」であった。最近の噂話はその報告を非現実的なものにした。騒音あるいは心の重荷が彼の目を見えなくした。全くの盲目となったのだ。火花が飛んだ。彼は再びこの国を逃げ出し(開け、ゴマ!)、難民となった。ベッドボードを突っ支い棒として、地下を**通**ってこっそりと故郷を抜け出し、この頑固者は、当世風のフィンランド船籍のスクリー船「アルサ【アラビアの女神】」号の、オランダ製のタンクの底にじっと隠れて密航し、大アジア【小アジアはトルコのこと】で、7世代目の新たなイスラム風の名前と、コルネリウス・マグラス【18世紀の実在のアイランドの巨人】(通常であれ異常であれ、悪しき年寄りじみた性格であった)のような体躯を得、その大アジアで彼は、アラブ人として、通りの角で、ペテロ献金ならぬバラ【トルコの昔の銅貨】での施し物のことで執行官たちをひどく悩ませた一方、劇場におけるトルコ人(最初の興行は全くの崩壊状態。この王は11回の詐欺)として、豊富な彼の万能の箱から、ベリーダンサーたちにトルコの硬貨を投げつけていた。電線が唸った。一般に広がった人々の驚きは、気の毒に思う気持ちに助けられ、穏やかにも彼の生存に期限を設けた。すなわち、彼が目にしたことは、一家の司祭でさえ希望を捨て、彼の残りの日々に区切りをつけてしまったということであった。そして彼は、創造主に召還され、スクラップ化されてしまった。人々のさえざりは国境を越えていった。悪名高き個人的疾病(世間一般に様々な形で存在する性病に関わる疾病)が、即座の終局を宣言し、彼の悪徳に満ちた行動の循環を終わらせた。きっぱりと。ジャムが壺の中に入っていた。彼は酔って睡蓮で飾られた池の中央まで入って行った。浮力のある水の中をこの魚の王はあえて進んで行ったが故に、体にきついシャツがニッカポッカに触れてしまう【溺れてしまう】ところまで行ってしまった。しかしこの時、第1級の援助者である漁師の手が、深さが数フィートは確かにあると思われる半ば清らかな水から彼を救ったのだ。傘は広げられた。情報を引き出そうとする【競馬の賭け?】男から彼が何杯か飲ませてもらったアンブレラ通りで、親切な職人ウィットロック氏が樽を1樽彼に与えた。あだなど添え名、つまり**神の意志が及ばない、その人物の所業に基づく異名**との間に、どのような力ある言葉が急速に生み出されたのか。イギリスの国会議事録によると、それが、それこそが、ダブリンのハサミムシをこの街全体のすべてのパブに行きわたらせているのだろう! パティアーは警棒の力を信じているし、ホー

ガンはホッド【煉瓦や漆喰を担いで運ぶための柄のついた箱】の音を耳にする。しかし店の主人は鉛筆削りの方が好きだし、コープとブルは剣玉遊びにはまっている。そしてこのキャンディー クラドック【ブッチ・キャンディーはアメリカの強盗団ワイルド・バンチの頭目の1人。またクラドックは clad dock とすると「服を着た被告人席着席者」の意味になる】は、【幼児の頃は】歩き回り、決して天秤の皿の上などではなく、ゆりかごの上で夢を見ていたのだが、今は静かに、パブの中で注意深くワイン架の向かい側で、後ろが上げ底の手箱を手元に置いて何度も賭けをしている。どれだけ不満が出たことか、何と度々証言が出たことか。戦いが言葉の中にあり、そして酒樽が世界となっている。楓の私も、柳の我々も、ヒッコリーの彼も、イチイの諸君自身も。何と1羽1羽のすべての鳥も彼のことをさえずっている！（99）暁の金色の栄光の時から蛍の微光の時まで。我々は寡黙でないとしたら、下品なおしゃべり屋だった。どこでも創世記などには関心はなかった。雨音だけが聞こえていた。永遠に降り続けよ！ パチパチいう音が痙攣のように聞こえていた。人間の害虫が、数々の泥だらけの街路を巡ってきては（循環しうる！）、また巡ってくる（過ぎ去った！）。またここに奴がいたぞ（息を切らしている！）。もっと厄介な騒音が起こった。奴は野放しなのだ。そして（何て奴だ！）、奴はどんなところにでもいて、巨大な立像となった、男っぽい所作の、かなり太った40歳代の元尼僧「デブッチョの巨人」に姿を変え、あらゆる人に気ままな振舞い方をすることで、人々の注意を引きつけるであろう。アンテナが沿岸地方のラジオの聴取者に、重税を取り立てる、同じ市民の徴税官が持っていた小カバン、キルト、スポーラン【スコットランド高地人がベルトから下げて使った袋】、ネクタイ、帽子の房、袖なし戸外着、防寒がなされたボロのマント、V.P.H.と読めるその徴税官かかりつけの仕立て屋（ベアンズファーザー【英国の漫画家、第1次世界大戦の漫画が有名】）のラベルが、スコールドブラザーの洞窟【ダブリンのアーバーヒルにある地下の洞窟】近くで見つかったことをブンブン言いながら伝えると、いかなる野獣が、狼が、反逆者が、4ペンスの価値しかない修道士が、彼を貪り食ったのかと、震え上がった人が何人かいた。モールス信号が幅広く送信された。白い汚れなき喜びと暗い慟哭とをワルキューレたちは誘発する、と。少年たちが言い張ったことだが、週末、聖霊降臨祭の時に、彼の家の裏門に、名前と肩書きがインクで書かれた板が打ち付けられていて、そこには退廃的な、糸のような、小塔状の、煉獄に封印されているような文字が、アイルランド語の早書きの筆写体で次のように刻まれていた。ここを退け。しかめ面の乞食め！ 優秀なる者に場所を譲れ！ 命令だ。貧乏人の能無し男め。内容はこのようなもので、ペンテコステ派【20世紀初頭のアメリカの聖書原理主義の1宗派】が口にするような冗談は一切ここにはなかった。たとえ彼の一族がどんなに社会的であろう

とも、また剛勇さに溢れ、思慮深さがはっきりと分かる彼の発言が、どんなに巧みで、学識があり、賢明で、狡智で、理解力があり、明確で、深遠であろうとも、また彼がたとえ隊長だったり、伯爵だったり、将軍だったり、陸軍元帥だったり、王子だったり、王だったとしても、また、人柄が切り裂き魔のマイルズ【19世紀から20世紀にかけての、兵士マイルズ・オリリーのこと。イタリアで教皇側の軍司令官となり、のちに国会議員となった】で、ブレフニ帝国【ブレフニはアイルランドの古代の支配的一族】に幾多の殺人用の館を持ち、テュリーモンガンの丘【アイルランド北部にある、ブレフニの族長たちの就任した丘】に就任式の場所を所有していたとしても、実際光線の階層のように、また執拗な薔薇十字会の会員のように、多様な形の殺人が実際にあったのであり、彼をバラしたのはまさにあのマクマホンの奴ら【マクマオン家は起源をアイルランドにもち、フランスで経済的、政治的に成功した一家】だったのだ。ヴェルダンの戦いで、防御している兵士たちが彼を放置し、もぎとられ直立した彼の右手は、自然色のアップルソースのような血で覆われた状態にあった。実際太った者も痩せた者も、大抵の場合クローターフに居住できる階級の数多くの篤志家（例えば、ジョン・ボイル・オリリー大佐【アイルランド共和主義同盟の一員】）が、（100）あえて3カ国語で書かれた3週に1回発行のダブリンの雑誌サタデー・イブニング・ポストを、借りたり譲ってくれと頼んだりして、いわば3人との同志である者が、陸地であれ水中であれ、全く酷い死に方をしたということを一時だけ確かめ満足しようとさえしたのだ。『トランジション』【フランスで1927年に創刊された文芸雑誌】も彼について震えながら叫んだ。海だ、海にいるのだ！ 彼らの希望は黙すのか。マクファーレンには嘆きの気持ち【『マクファーレンの嘆き』は、トマス・ムアの詩に付けられた曲の名前】がないのか。彼はバーソロミュー・ディーブ【ペルー、チリ沖の海溝】の海面から何リグも下の深みに横たわっていたのだ。

新聞だよ！ 新聞！ ここで売ってるよ！ 総督が美少女の女子校を訪問したよ。3人のアイルランド人の子供は、フェニックス公園のスカンジナビア人の巨人と一緒にいた。ビール好きの女は、乱暴者の下品な金持ち農夫を口汚く罵り、一発お見舞いしたよ。

しかしそれにもかかわらず、彼らの聡明なる同時代の小市民たちは、この救われない難民が自殺に見せかけて殺された次の日の朝、ちょうど蛇が樫の木を伝ってゆっくりとビーバーの公爵のいるところの下っていくように、（諸君はサケの町パルティーンのライムストーン通りにおいて、1本のアメリカポプラから異国風の琥珀色の液体が滲み出るのを見、これはロッキーモミであって、貴賓あるノーブルモミではないのではないかと叫んだかもしれない）9時15分前に、彼の改悛を懇願しながら、教皇の不撓性を表す大釘のような煙が、クウィントゥス・センチマク

ス【訳すと「100 戦錬磨のコン王」。コン王は紀元 2 世紀のレスター地方のアイランド王。この場合は教会名か】の斑状変成岩でできたバター・タワー【フランスのルーアン大聖堂にある塔】の 7 番目の破風から、時間ぴったりに流れ出るのを見た。そして午後 10 時 30 分に、彼が永久不変の存在になることを誓う言葉が語られる中（目の見えぬ預言者を見よ。我々は長い年月耐えているのだ）、消えることのないランプであり、ジグurat【古代メソポタミアの巨大な聖塔】の内部半分を広く照らし出すかがり火であり、名誉昇進辞令書に名前が載り、立て髪が黄褐色の、静かに揺れる青き足をもつ破壊の飛竜であるこの傑出した男と、棒付き飴のような女は、人生の長い間（アア、長いこと！ 何と長いこと！）苦難の夜を送ってきた中で、良質のガラスをはめ込んだ無目【ドアと上の明かり取り窓を仕切る横木】と、光を導き入れる 1 枚 1 枚のガラス板からなる窓から差し込む赤い光に照らされていたのだ【教会のスタンドグラス】。

それ故どのように考えようとも、次のように言ったり考えたりしてはならない。すなわち、この聖なる建物にいる囚人は、たとえ骨なしのイーヴァルの人物【「骨なしのイーヴァル」は 9 世紀のバイキングの首領のこと】であれ、厚顔のオラフ的人物【オラフ・ザ・ホワイトは 9 世紀後半のバイキングの海賊王】であれ、せいぜい 1 つの削り取られうる石ころに過ぎず、空虚な未来に対して粗野な吐息を吐く者であり、自らの口答えの中のきたない言葉に対して激怒する者だ、ということである。いや、もっと厳密に言えば、彼は 3 度だけ変化したイニシャル【HCE を HEC といたりしたこと】に過ぎないが、貧しい者にとっての、部屋という世界を超えた、世界という部屋に入る主要な鍵なのだ。また運河沿いで一緒に暮らしていた彼の死んだ仲間たちは、クルト・アイユルド・ヴァン・ダイク【原文のイニシャルが KID になるので、「子供」を暗示。この場合は HCE のこと】（居場所の定まった、実態がはっきりとしている住民が知覚する引力と、実態がはっきりしていない、我々の宇宙の中をたまたま通りかかるだけの彗星の支配力は、彼の真正なる人間性を仄めかしている）に関して、彼の 4 次元立方体としての存在の正当性を、衰れにも深くまた長い間疑ってみたいと思うようなこともほとんどなかった。じっとしている、アア、機転を利かせよ！ 黙って彼に語りかけよ！ 楡の葉よ、黙していよ！

(101) あちらこちらの女性たちが訝しんでいた。彼女は早く流れるのか、と。

私たちにすべてを語って。私たちはすべてを耳にしたいから。だから私たちに彼女についてのすべてを語って。お転婆娘のように見えるように、淑女のようにも見えるのかどうかを。そしてまたなぜそう見えるのかを。そして彼が彼ら【子供たち？】と同じように、自分の部屋の窓を閉めたのかどうかを。メモと問いによって、断片的情報と答えを。笑いと叫び声をとめないながら、人生の浮き沈みにつ

いて。サア、お互いの声を聞きましょう。そしてそれを記載しましょう。そして薔薇の葉を滑らかにしましょう。戦いは終わったのよ。勝利したのよ勝利したのよ勝利したのよ勝利したのよ。それはユニティー・ムア【20 世紀初頭の女優】だったのか、それともエステラ・スウィフト【ステラはジョナサン・スウィフトが、親密な関係にあった、使用人の娘エスター・ジョンソンに与えた愛称】だったのか、それともヴァリーナ・フェイ【ヴァリーナはスウィフトが恋愛関係にあったジェイン・ウェアリングの愛称】だったのか。それとも第 4 の女性だったのか。トーマス、伯父さんに場所を譲りなさい！ 少女たちよ、つまらぬことは言わないように！ 誰なのだろうか。しかし、（尋ねるのは 2 度目だ）いつも問われていることだが、人口の多いルーカンやチャペリゾッドといった地域で、あの時公園での災いの元となったのは誰なのだろうか。こうした問いは、HCE のような頭を上げ直立した人類が出現した時よりもずっと後の時代において、ピーボディー【アメリカの商人、慈善家】の持っているお金はどれほどの金額かとか、もっと直裁に言えば、ウェリントンの白いネクタイの産地はどこかとか、もっと新生代の時代でいうならば、誰がパークレーを襲ったのかとかいう問いと同じように、いつも問われているものだ。尤も最後の問いについては、当時と同様今日でも、当意即妙の答え方を知っている、生まれてから 140 ヶ月かそれ以上たった女子生徒や、可愛い金髪の少女や、燃えるような赤いウェーブの髪をもった、ダブリンの城壁の近くに住む、戦時中の妻や平和時の未亡人なら、襲ったのがパークレーその人で、卑劣にも 1 人でいるときに襲われたのがパークレーではなく（このことについて語るには、役に立たない新聞はいかなるものも必要ない）、そう！ そのとおり！ ロシアの将軍であることを常に、確実に、皆知っている。3 カ所のアイランド政庁にスパイとして雇われ、この毒を持っていた、人の詮索に明け暮れる人物はどのような人物なのだろうか。憎しみに満ちた笑みの売り手はどのような人物なのだろうか。あのような悪意ある辛辣な文句は、料金発信者払いであれ料金受取人払いであれ、貼付用の女王陛下の頭、つまりあの地味な悪臭漂う絆創膏のシール【切手】【を貼った封筒に入れる】なら覆うことが出来るだろう！ 温泉場の鉱泉水を飲むための大社交広間に集まった女たちたちは、9 日間冷笑の言葉を吐いていたし、またバケツでビチャビチャ音を立てている洗濯女たちも、おまけに普通のオランダ人やポーランド人も、新聞のジョーク欄も、女房たちも、星が煌めいている時に、彼女の口のない顔【川】の上流地域や彼女の一時的な波が彼女の旦那のだと、未だ思って彼女をからかっていたのだが、こうした中、誰よりも彼に近い者、誰よりも彼にとって親愛なる者、朝早くにまず最初に彼の心を温める人物、家長である彼と絆を保っていた女性、息子の息子たち全員の祖母である者、この彼女は彼の目を彼女のベッドへと向けさせ、1 本の歯を子供に与え、ついには 1 本の歯を 111

人に与えたのだ。私とあなたに！ 一番下の息子と可愛い娘に！ 腹が減った者と機嫌が悪い者に（もし彼女が彼女の歯よりも歳をとっているとしても、(102)あなたの髪よりも若い髪を持っているのだよ、あなた！）。彼女は彼を、彼が落下したあとでも守り、容赦なく彼の目を覚まさせ、彼にやる気を起こさせ、彼に能力を持たせた。彼のそれぞれの鼻翼にアゼリアの花をかざした。彼女は休むことなく走って彼を探し求めるであろう。そしてついにはそうしながら、遠くの真珠層の海（水、雨、尿）を探す中で、海の助けを得て彼の偉大さの影の部分、屈曲した部分を隠してしまうことになるであろう。そして彼女は立ち上がり、峻烈の名の下、この毫碌した者のために、珊瑚礁の古い下界を焼き払い、地域住民を引き連れ、あちこちで時を空費しながらも、娼婦が使うようなブローグ【粗革製の靴】とコランダール【野菜などの水切りに使うボール型の水切り】のようなバスル【スカートを膨らませるための昔の腰巻】を身につけ、小さなボレロとボアなどを着、髪飾りとして20の2倍の数の古臭い巻き毛を作り、目には眼鏡をかけ、耳には鋤【のような眼鏡の端】をつけ、パリジェンヌとしての素晴らしい鼻には十字架【のようなメガネのブリッジ】を乗せ、暖かな冬の七旬節の日曜日に鳴るような、教会の境内のカランカランという音が鳴っている中、クリスマスの日から、ポーンやビショップやルークを駒入れ用袋に入れて、ペロタ【スペインや中南米で行われる球技】で使われるボールのように球形にし、誇らしげに自転車のサドルにまたがって、1人で前を進んでいった。バスク地方の偉大なる最高の閣下 HCE のために。彼を中傷する者の頭を粉々にしよう。

誠に小さき者よ、さらに一層この死者を弁護せよ！ この都市の聖母マリアよ、あなたの温かき心に宿る慈悲を与えたまえ！ この庭師は紅茶以上の存在なのだ。薬剤師としての言葉をもたらすのだ。彼の邪魔をしてはならない。そして旅人である諸君、彼を休ませよう！ そして彼の墓場のいかなる埋葬品も取って行ってはならない！ そしてまた彼の墳墓を損なってはならない！ 死をもたらすツタンカーメンの呪いがかかっているのだ。気をつけよ！ しかし小柄な婦人が待っている。彼女の名前は A.L.P. そして諸君も同意するだろう。彼女は彼女でなければならぬ、と。というのも、愛らしい髪を背中にかけているからだ。彼はその愛の力を無鉄砲なハーレムの女たちの間で使った。ポビー・ナランシー【オレンジ色のケシの花の意味】、ジャリア【黄色の意味】、クローラ【緑色の意味】、マリカ【マリブルーの意味】、アニリーン【藍色の意味】そしてバルメ【スミレ色の意味】。彼女たちめいめいは、その気まぐれさがどんなものであれ、虹の1つ1つの色の気質を持っていた。しかし彼はそれへの対処法を打ち出した。今日はちょっとした喧嘩、今夜はキス、そして明日は永続的恋慕。でも、子供を持って不自由な身体でいる者【イヴとしての ALP】以外の誰が、汗を垂らしている者【アダ

ムとしての HCE】を弁護するのであるうか。

彼に彼女の 9990 項目の借地権【自分の建物を建てるために他者の土地を借りる権利】と、長い巻き毛と、上品に染めた普段着を売ってしまった。【結婚を意味する】
役立たずの、だまされやすい大カモは、それを全部鵜呑みにした。

その現金払いはどのようにやったのか。

ろくでなしめ！

アイランド・ブリッジで彼女は海流に出会った。

いいぞ、やったぞ、やったやった！

フィン流れ、彼女はそれに乗った。

いいぞ、やったぞ、やったやった！

我々は皆大騒乱に巻き込まれた。

それは彼女が我々に対して起こしたこと！

悲しむべきことだ！

遊牧民もまたいかなる者も、ネブカドネザル王【HCE】とともに放浪することはないかもしれないが、ナアマン【ヨルダン川での水浴で自分の癩病を治した、聖書中のシリア人の隊長】にもまたいかなる者にも、ヨルダン川【ALP】のことを笑わせてはならない！ というのも、我々は、まさにこの我々は、彼女の石碑の上にかかっていたシートを取り、そこで彼女の木に我々の心をかかけたからだ。そして我々はバビロンの水辺で、彼女が我々に願ったように、耳を傾けるのだ。

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947)を使用した。本文中の()内の数字は、*Finnegans Wake*の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。()内の日本語は、原典の()内を訳したものである。太文字の箇所は、書名と曲名を除いた原典のイタリック体の箇所である。

参考文献

- 1) Anderson, John P. *Joyce's Finnegans Wake: The Curse of Kabbalah* vol. 1. Boca Raton: Univers A.Lubishers, 2013.
- 2) Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking

Press, 1944.

3) Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.

4) McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.

5) Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.

6) Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's*

Masterpiece. New York: Garland Publishing, 1982.

7) Slepon, Raphael, ed. *Fleet Search Engine in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.

8) *Glosses of Finnegans Wake in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.

9) 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年

10) 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』
第1部第4章の概要
(75.1~103.11)

大島由紀夫*

(* 東京海洋大学名誉教授)

要旨: ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第1部第4章75ページの1行目から103ページの11行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。この第4章では、HCEの死と墓、復活への兆し、フェスティ王(HCE)の裁判の様様、無罪放免後の彼の動向についての各噂話、4博士の議論、ALPのHCEへの愛情等がモチーフとして扱われている。

キーワード: フィネガンズ・ウェイク、第1部第4章、概要